

「こおりやまの米」通信



2 ぬれをゼロに



編集：郡山市

JA福島さくら郡山統括センター (TEL. 024-921-0503)

NOSAI福島中央支所 (TEL. 024-933-3307)

県中農林事務所農業振興普及部 (TEL. 024-935-1310)

発行：郡山市農作物生産対策協議会(郡山市園芸畜産振興課) (TEL.024-924-3761)

Vol.1 播種準備編(種子の準備～播種)



* 過去の記事は郡山市ホームページから見る事が出来ます。

こおりやまの米通信

検索

1 播種の準備

1 作業場等の清掃

いもち病菌やばか苗病菌は、わらや籾殻等に潜んでいます。播種作業を行う前に、作業場や育苗ハウス内の清掃を行い、感染を防止しましょう。

また、前年の育苗期間中に苗立枯病(カビ)が発生した場合は、育苗箱や育苗床のビニールの消毒、または更新等の対策をとりましょう。

2 塩水選(比重選)

塩水選を行うことで、充実した良質の種子を選ぶことができます。そのため、塩水選は必ず行いましょう。

塩水選後は、発芽障害を防ぐため軽く水洗いし、塩分を取り除いてから浸種しましょう。

塩水の作り方[水10ℓ当たり] ※

種類	比重	食塩(kg)	硫酸(kg)
うるち	1.13	2.1	2.7
もち	1.10	1.6	2.0

※食塩または硫酸のどちらかを使用します。水温や吸湿程度によって変動するため、比重計で測るのが原則です。

2 種子消毒

水稻種子の更新は、毎年行うことが基本です。

未消毒の種子を購入、または自家採種した場合は、塩水選後に次のいずれかの対策を実施しましょう。

1 化学農薬

種子消毒剤(モミガードC水和剤、テクリードCフロアブルなど細菌病・苗立枯病に登録のある剤)を規定量用いた薬液の中で種籾袋をよく揺すり、内部まで薬剤を均一に付着させます。特に銅を含む薬剤は沈殿が発生するため、浸漬中に薬液を1～2回攪拌しましょう。

野焼き等による火災の防止について

野焼き等による火災を起こさないよう、野焼き等のルールや注意事項を確認し、地域ぐるみで火災予防に努めましょう。

2 生物農薬

エコホープDJやタフブロックなどの生物農薬は、適正な処理温度を守らない場合、効果が低下しますので、温度管理に注意してください。また、処理後は風乾や水洗いをせず、直ちに催芽を行います。

3 温湯消毒

温度と時間を正確に計測しないと効果が劣るだけでなく、発芽率も下がります。うるち米では60℃の湯に10分間、または58℃の湯で15分間処理し、終了後は速やかに冷水で温度を下げ、乾かさずに浸種します。もち米は発芽率が低下しやすいので、温湯消毒は控えましょう。

種籾袋の内部まで温度が均一になるよう、よく攪拌します。湯量が少ないと水温が大きく下がり消毒効果が低下するため、十分な湯量を確保し、一回当たりの処理量は、取扱説明書に従いましょう。

3 浸種 ～十分な「吸水」と「酸素」がポイント～

1 浸種水温は12～15℃を目安とします。10℃以下での浸種は発芽不揃いや、種子消毒剤の効果が低下する原因となります。浸種期間は積算水温(平均水温×日数)で100℃が目安です。ひとめぼれ等の休眠の深い品種は十分に浸種してください。

2 種籾袋には余裕をもって、種子を八分目以下に詰めます。ぎっしり詰めると中心部が酸素不足となり、発芽が不揃いとなります。

3 種子消毒剤の効果は、種籾の微細な隙間まで薬液に浸漬されることによって発揮されます。そのため、浸種開始から2～3日間は水を交換しないようにします。

その後は酸素供給のため、1～2日の間隔で水を交換しましょう。

河川やため池での消毒種子の浸種は、消毒の効果がなくなるだけでなく、発芽の不揃い、環境汚染にもつながりますので、絶対にやめましょう！



4 播種

～適正な播種量で健苗を確保しましょう～

1 播種量と育苗日数の目安(表1)

適正な播種量とすることで健苗を得られ、活着と初期生育が良くなります。老化苗とならないよう、田植え日から逆算して播種量と播種日を決定しましょう。

ふくひびきは粗植や植え付け本数が少ないと減収しやすいので、十分な苗を確保してください。

2 播種

播種前に空の育苗箱を使って播種量や箱施用剤の落下量を調整しましょう。播きムラがあると移植時の欠株の原因となるので注意してください。

3 病害防除(表2)

販売されている培土は焼土殺菌されていますが、播種後の立枯病菌及び細菌の侵入に対しては薬剤を使用し予防する必要があります。予防のために、播種当日に防除を実施してください。

4 温度管理

細菌病の予防のために、出芽温度は28℃以下にしましょう。また、苗立枯病(カビ類)の予防のために、10℃以上に保ちましょう。

緑化後(1葉以降)は日中は20℃以下、夜間は10～15℃を目標に管理しましょう。



表1 播種量と育苗日数

苗種	播種量 (乾籾重/箱)	育苗日数	葉齢
稚苗	200g	20～25日	2.0～2.9
中苗	100g	30～35日	3.0～3.9

表2 育苗期の主要な病害と対応する農薬例

	病名 病原菌	症状	発生条件	カスミン	ナエファイン	ダコニール	ダコレート	タチガレエ
				粒剤	フロアブル	1000	水和剤	ースM液剤
細菌	もみ枯細菌病	坪状に枯れあがり、心葉が容易に抜ける	高温多湿 高pH(6.0以上)	○				
	苗立枯細菌病	坪状に枯れあがり、基部が白化する	高温 苗の生育不順	○				
苗立枯病	リゾース	白いカビ	高温多湿 多窒素・厚播き		○	○	○	
	フザリウム	白からピンクのカビ	低温過湿 高pH(5.5以上)		○		○	○
	ピシウム	ドーナツ状に枯れる カビは見えない	低温過湿 高pH(5.5以上)		○			○
	トリコデルマ	白から緑のカビ	高温多湿 低pH(4.0以下)				○	

【需要に応じた米の生産をお願いします】

令和5年産米の価格安定のため、主食用米の作付けは昨年並みの面積となるよう作付転換への御協力をお願いします。

転換作物は、所得が確保できるきゅうり等の園芸品目や、主食用米と同様に作付けできる飼料用米がおすすめです。

令和6年以降の飼料用米の助成金は、天のつぶ等の主食用品種の助成単価が減額されるので、来年に向けてふくひびき等の飼料用の専用品種の作付けを検討してください。

【鶏糞の肥料的効果について】

水田に施用した鶏糞は、含まれる窒素成分のおよそ6割が水稻1作で吸収されます。鶏糞を施用する場合、鶏糞の窒素成分量から吸収量を算出し、基肥窒素量を削減してください。

例:窒素成分4%の発酵鶏糞ペレット80kg施用

$$0.04 \times 80 \times 0.6 = 1.92\text{kgの基肥窒素を削減}$$

施用は窒素の流亡を避けるため代かき直前としてください。

【育苗ハウスでの農薬の使用について】

水稻育苗後のハウスで野菜等を栽培する場合、育苗に使用した薬剤による残留汚染の危険性があるため、育苗開始前にハウス内に不透水性無孔シートを敷き詰め、育苗に使用した薬剤が土壌に流出しないよう対策を取ってください。

農薬の使用時には、ラベルを確認し使用法を守りましょう。

【農作業事故に注意しましょう】

毎年農作業中の事故により農業者がお亡くなりになっています。その多くが、トラクター操作中の転倒や転落によるものです。トラクター操作時はシートベルトを装着し、道路走行時は左右ブレーキを連結しましょう。

特に春は水稻の作業で慌ただしく、事故の発生が多い時期です。余裕のある作業計画を立てるとともに、作業中も定期的に休憩をとるように心がけましょう。